
魔王候補者のあたし。

風涼 レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王候補者のあかし。

【Nコード】

N5397S

【作者名】

風涼 レン

【あらすじ】

『闇を操り、魔力も無尽蔵…。素晴らしい。そなたを次期魔王候補者と認めよう』――

「……っは……？魔王……ッ！？んなのなんなくていーつつの……！」

なんかよくわかんないうちに魔王候補者となってしまった主人公・アオのチートな冒険話。

魔王候補者あ？

目が覚めると――真っ黒の中に、一人、あたしは立って
いた

あれ？私、車で跳ねられて死んだよーな…？

じゃあ…ここ、地獄か…。

まさか、18で死んじゃうなんてなあ…。

ぼーっと、考えていた。
そうしたら、いつの間にか、

考えていたことが分からなくなつて。

どうやら記憶が抜けおちたみたい。

それと同時に、周りの闇がドツと増えた

闇にどんどんおぼれていく
まるで水の中に居るように、息苦しい

なんで私の ^{なか}身体にはいつてくんのッ!!

私に入ってくんな
!!

耳に聞こえないくらい大きい音がして、

急に、闇が散っていった

『闇を操り、魔力も無尽蔵……。それに、
オートマティック　アリア　詠唱
スキル
能力』持ちか……。……。素晴らしい。そなたを次期魔王候補者と認
めよう――』

「……っは……？魔王……ッ！？んなのなんなくていーっつの……！」

思いっきりあたしが叫んだと同時に、
あたしの意識は薄れていった。

魔王候補者あ？（後書き）

オリジナル小説をうpしたことないので、

王道なトリップ系を試してみようということではじめました

読んでくださってありがとうございますっ

初めての敵がスライムじゃなくドラゴンってやーよっ

「…起きてくださいっ、起きてっ」

んー、まだ、寝たい。
あと五分…

「早く起きないと、死んじゃいますよおっ」

…あれ？
母さんより若い声

…って、何！？

『死んじゃう』って…！？

がばっと起き上がり、目を開けた。

ここはどつやら森の中のようだ

ちなみに目の前には、

金髪碧眼超絶美少女（おそらく15歳程度）

と、

ん
その後ろにでーっかいドラゴンさ

って…ドラゴン…ッッ！？
嘘おおお！？

「…ッ！？なんなのこの状況！？ごめん説明お願い！」

あたしは急いで立ち上がると、その子を庇うように前に立ち、その子に問いかけた。
するとその子おどおどしつつ、

「えっとつ、私もよくわかんないんですっ！目が覚めたらここにいてっ、それで、貴方がいて、起こしてみようとしたら、ドラゴンがいてっ。そ、それで、なんか髪の色も変わってるしでっ」

と話してくれた。

…うん、意味わかんないや

そうこういつているうちに、ドラゴンはこちらに攻撃してきた

動きはそんなに速くない。けどっ、

あたしがよけると、攻撃は後ろの子に当たるッ！！

後ろの子へ目をやると、完全に固まっていた。

ダメだ…ッ

迫り来る

大きな手

鋭い爪

「…っ！」

美少女庇いながら、よける。

ドラゴンの爪は、あたしの腕を深く抉った

腕から大量の血が出る。

あーっ、くそっ、痛い！

意識が朦朧とした。

「大丈夫ですかッッ！？血…っ、血が…！！」

美少女の顔が真っ青になっていた。
大きくてぱっちりした目からは大粒の涙が零れ落ちている

「だーいじょぶッ！」

そうは言ったものの、ドラゴンなんて倒せないワケで。

真っ赤な血が地面に広がり、
倒れているあたしの姿が浮かんだ
ぼんやりとしているけど
このときあたしは——死んだ

もう一度死ぬなんて、

嫌だ……！！

「くそっ、あのドラゴンが
しまったら　いいのに」
　　竜巻かなんかで　ぶっ飛んで

そう。

あたしがそういった途端、

体から沢山の 何かが流れ出していった。

するとあたしの周りに急に真っ黒な魔方陣みたいなモノが現れ、

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ンツツ！！

急に現れた 竜巻に、ドラゴンはそりゃあもうギャグのように、
ぶっ飛んでいった。

「…え…今のどういことー。」

もうなんだかわかんない急展開に、あたしは傷の痛みも忘れてぽか
ーんとした。

美少女は勇者でした。

「傷、大丈夫ですか…っ！すいません…何もできなくて…。う、う
うっ」

「あー、もー、そんなに泣かなくていいよ？まあ、あたしら助かった訳だしさ。ほら、にこーってしょ？」

「で、でも…傷…っ。」

うあー、もうめんどくさいなあ…

あたし、女の子とちっちゃい子の涙、ダメなんだよね

今、あたしの目の前には大粒の涙をこぼす金髪碧眼美少女がいる。

泣き止んで欲しいんだけど…

この傷があるかぎり、無理…だよ

「まあ…あたし、体頑丈だからこんな傷くらい　　…すぐ元通りにな

るって。気にしないで？

……っ？」

そのときに、さっき感じたような、

何かの流れ出ていくのを感じた

そして、またもや現れる真つ黒魔方阵。

今度はちよつと小さめで、

あたしの腕——細かく言つと傷のあたり——に現れた

「……あれ？痛くない。……傷、治つたや。」

「え、ええっ！？嘘…？」

美少女がびっくりしてあたしの傷口を確認したけど、
やっぱ血止まってて、傷も塞がってるみたいだった

…あたし、何者？

さつきから、あたしの言ったことが本当になっていく

…便利だけど…ちょっと不気味だ

しばらく傷口を眺めて、さわって、確認し終わったらしい美少女は、

「本当だ…。治ってます…。まるで、魔法みたい」

と呟いた。

「確かに魔法みたいだけど…うーん、あたし、いつの間にこんな力
ゲットしたんだろ。」

「魔法使えるなんて、カッコイイです…！」

美少女のキラキラした視線に、
不気味な力だけど、まーいっかなあと思った。

「あ、そういえば貴方の名前はなんていうの？」

名前を知らないと、これから会話しにくいかなあと思って、たずねた。

「あ、えつと、
雪野ゆきの 雫しずくです。」

「ん、じゃあ、『シズクちゃん』て呼ぶね」

あたしがにつこり微笑むと、

「っ…!？」

シズクちゃんは声にならない声を出して、ぼんつと音を出し真っ赤になる

「…？名前呼ばれなれて無い？上の名前がいい？」

「いえっ、このままでいいですっ。」

…はう…あの笑顔は反則です…女子でもきゅんと来ちゃいます
…（小声）…

シズクちゃんの後半の言葉は聞き取れなかった。

「？…今なんて？？」

「あ、えと、なんでもないです！

あ、ところで、貴女のお名前はなんておっしゃるのですか？」

シズクちゃんに上目使いにたずねられ、急いで答えようとした

…んだけど

…何故か、名前が思い出せない

記憶喪失？

でも、ま、ここでそれを言ったってシズクちゃんがわたたするだけだし…

「アオ、っていうの」

この名前の理由は、ただ単にシズクちゃんの蒼い眼が綺麗だなーと思ったから、というただそれだけ。

「アオさんですか…。いいお名前ですねっ」

シズクちゃんが笑顔で言った

「ありがとうー」

私もつられて笑った。

ガサガサガサガサガサツツ

そのとき、急に周りから音が聞こえた

ここは森の中だから、草をかきわけ進んでいる音だと思う

その音は近づいてくる

……確実に、あたしらのほうへ進んできている

「あ、アオさん……っ」

得体の知れないものが近づいてくる恐怖に、
シズクちゃんはカタカタ震えていた

「大丈夫。」

あたしにはワケわかんない力があるし。ね？」

シズクちゃんにそう言い聞かせた。

近づいてきた証拠に、足音が聞こえてきた

足音からして、もうだいぶ近くに居るはず

そんなに大きな足音ではないし…

もしかして、人間？

「いたぞーっ！！勇者様だ！

だが、『黒』の者と一緒に居る…

」！

目の前に現れたのは、兵士の格好をした青年だった。

やっぱり、人間だったか。

その一人の声を合図に、人が集まってくる

『黒』の者、とはあたしのことだろう
あたしは黒髪黒目、シズクちゃんは金髪碧眼だからだ

…ということとは

シズクちゃんって、勇者っ!?

美少女は勇者でした。(後書き)

シズクちゃんは勇者さんですw

とりあえずアオとシズクちゃんの名前出せて満足ですw

意味不明な文章失礼いたしましたッ (土下座)

チート能力で勇者の従者の位置に

「その『黒』の者、勇者様を離せ!!」

年のいった茶髪に茶色の眼の隊長らしき人物（ちなみにおっちゃんである）が私に向かって叫んできた。
うっわ、絶対ツバ飛んだって今。

その『ツバ飛ばしおっちゃん（仮）』から距離をとりつつ、
あたしは苦笑いした

離せ、って言われても…ねえ??

「シズクちゃん、離してほしい？」

「ふえ……っ…離さないでほし、いですっ…アオさんっ…っ……」

逆に―― ふるふる震えてる美少女シスクちゃんがあたしの腰に抱きついてるんだけど？

「どーみたって、この子はあたしに助け求めてるじゃん。 あんたらは今んとここの子の敵……だよ？」

「うるさい！人間の敵なのはお前らだろう！！」

『魔族の色を持つ者』め！』

その言葉に、
周りが急に静かになる

「隊長……それは禁句です……！！」

ルーフェア国憲法第12890、【黒者有人権】をお忘れですか！』

そう言ったのは紅い髪に蒼い眼の、イケメソ
やーっぱ、イケメンは心もイケメンなんだね
いい奴だ

そのいい奴の言葉にツバ飛ばしおっちゃん（仮）は少し焦った顔をした。

「…く…と、とにかく…」

勇者様をこちらへ渡せ、その女！」

剣をかまえるツバ飛ばしおっちゃん（仮）

「それは無理！」

実はあたしつてば勇者の従者として召還された、魔法使いなの勇者様のおそばに居なきゃダメなわけ」

魔法使い、で正しいかはよくわかんないけど

変な力があるのは本当だから、あながち間違いでも無いだろう

「魔法使い、だと…？」

魔法具も持たぬお前がか？」

そういつて、馬鹿にしたように笑うツバ飛ばしおっちゃん（仮）。
なんかムカつときたー

「魔法具？」

あたしにはそんなもの必要ない

見てなさい、あたしの力を」

たった二回だったけど

力の使い方はもうすでに理解してる

使い方はとっても簡単。

体から、水のようなものを流れ出させるイメージで

「あたしの目の前に」

こうなればいい、と『願う』

「現れる、氷の柱ッ」

それだけ

パキ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ン
ッ
！
！

地面から生えるように、

大きな氷の柱は姿を現した

できるかは一か八かだったけど…

魔法ばいモノができてよかった

あたしの力に、その場に居る全員が眼をみひらいた

誰かがぽつりと呟く

「魔法具無しの、無詠唱…！？」

こんな魔法使い、見たことねえ…」

その言葉に

あたしはにっこりと微笑み

大きな声で、宣言するかのように

答えた

「見たこと無いのは当たり前

あたしは、世界を救う勇者の従者…

『アオ』なんだから…！」

フツ、きまった。

なんか今、あたしすつごくかつこよくきまった

そんなあたしを見て、

ぽかんと固まるツバ飛ばしおっちゃん（仮）に、「それでもあたしと勇者を引き離すなら魔法であんたらを倒してやる」と、最大の黒い笑顔でいうと、

「わ、わかった!!」

君も勇者とともにきてもらおう!」

と言った

「アオさん、凄いです…!」

びろびろりん。シズクちゃんのあたしへの高感度が上がったようだ
キラキラとあたしを見つめる視線に、一抹の不安を覚えた

「…百合展開とか、無いよね…？」

あたしは兵隊達についていきつつ、
誰にも聞こえない程度の声で独り言を言った

チート能力で勇者の従者の位置に（後書き）

今回もぐぐだいみふめーいw

読んでくださってありがとうございます！><

あたしの部屋ボロボロじゃん

あたしとシズクちゃんが、兵隊達につれてこられたのは大きな町
じろじろと、こちらを見てくる嫌な視線

『魔族の色を持つ者』め！

あの言葉と表情から考えるに…
あたしのこの黒の髪と目は、嫌われている…いや、むしろ

憎まれている――。

あたしとシズクちゃんを囲む兵士の中に、紅い髪に蒼い眼のイケメ

ンが見えた。

「…。」

おーい。その紅髪蒼眼の君ー」

「…？俺、ですか」

「うん、君だよ」

どうやら紅髪に蒼眼のイケメソは『黒』に対する偏見が無いようだから、

質問にちょうどいい、と思った

「あたしがまつ黒だから、ダメなんだっけ？」

「…黒が差別されているのは…確か、です」

「ふーん、

なら、色を変えればいいんだ」

「色、を…変える……？そんな魔法、存在しません」

「んー、そつか。」

じゃあここでパツと色変えたらおかしいか。

あたしのよくわかんないこの力なら————きっと、簡単にで
きるんだろーけど

「目立つのはあんまよくないよね」

「……アオさん……？どうかなさったのですか？」

「ん、なんも無いよー。……ん、もう城ついたんだ」

目の前には大きな、そりゃあもう大きな城。

どんぐらいかって言うと、もうこの近さじゃ全部が見えないくらい

大きな門が開いて、中に入っていく

門を抜けると、すぐに城の扉の前に来ていた

「!？」

あ、アオさんっ、今…!」

「瞬間移動したね。これも魔法か…？」

ふーん、おもしろいじゃん

あっちこっちに魔法があって、なんだか楽しい

シズクちゃんの目も、キラキラしてる。

城に入ると、あたしはシズクちゃんと部屋を分けられた

外を見ると、おそらく今は夜

勇者関連のイベントは明日だということ、
ここで寝ろといわれたのだが…

「汚すぎだろ」

私が連れてこられた部屋は、使用人さえ使わないようなボロボロの
物置のような部屋だった

…つか物置だろ

モップとかもあんどコラ

「黒に対する差別…よくわかるな」

汚いベットに腰掛けて、呟く

普通の人なら諦めて寝るか、怒りにいくだろうが――

私には なんて できる（おそらく）力がある。

「部屋よ、今すぐあたしの寝れる綺麗な部屋になりなさい」

ゴチャゴチャゴチャと周りが混ざる

ずっと見ていたら気持ち悪くなった。酔った。

しばらく眼をつむっていたら、
ぐにゃぐにゃした感覚が消えた

眼をひらくと、小さいが綺麗ですっきりした部屋。

「…使つといてなんだけど…あたしの能力、すごすぎ。ありえない
っつーの」

しばらく自分の無敵すぎる力に一人で笑って、急に虚しくなりあた
しはベッドに寝転がった
疲れていたのか、眠気はすぐに襲ってきた

あたしの部屋ボロボロじゃん（後書き）

なんか話がすすまないです^^；

イケメソ君が案内人

「ん、」

眼が覚めると、朝だった。

力で部屋を変えたおかげで、ぐっすり眠れた。
ベッドから起き上がり、伸びをする。

カーテンを開けると、明るく爽やかな朝の日差しが差し込む

「いい天気ー」

「あ、そうだ。」

今なら誰も居ないし、自由にチカラを使える
だから、今ってチャンスだよな

「髪の色と、目を変えておこー」

どうやら黒色は、嫌われてるらしいし
これからこの世界で過ごすには、めんどくさい

なんだかびびってるみたいでやなんだけど
仕方ない。

めんどくさいの嫌いだしね

どうせなるなら、目立たない暗い色がいいっしょ？

昨日、兵士達の中で一番多かったのは…
確か、茶色の髪に緑の目。

「茶髪で緑の目になあれ」

ちよつとふざけて言ってみた。

…あたし、バカの子じゃん

こんなふざけた言い方でも、別に関係なく力は発動するようだった

黒い髪が、少しずつ明るくなっていく
黒い目に、少しずつ緑が混じっていく

部屋の鏡には、茶髪で緑の目をしたあたしがうつつてた。
なんだか違う人みたいで、無駄に恥ずかしい

「やっぱりこの力、すんごいな。怖いけど…

とりあえず、上出来じゃん！」

鏡の前であたしがうんうんと頷いてたら、
がちやり、と急に扉が開いた

一人で鏡をガン見しちゃってたあたしは、焦って扉のほうを向いた

「失礼します。王との謁見の時間で…

……！

その髪の色と…目の色…

…それに…

…部屋が…こんなに綺麗に…」

入ってきたのは、昨日の紅い髪に蒼い目の良い奴なイケメソ。
ものすごく驚いている。

彼は昨日身に着けていた兵隊服や今の服を見るに、多分下級兵だよねえ

いちおう勇者の仲間一号だと言うのに、なんだこの扱いは
あたしにはメイドさんなんてもったいないってか？
なーんか、むかつく

少しイライラした表情をしていたのか、イケメソ君は少しわたわた
していた。

「あー、なんかごめん。考え事してた。

謁見か。呼んでくれてありがとう

あ、髪の色と目の色、あと部屋は昨日見せたあたしの特別な魔法で
かえた。

それ以上の説明は無い。」

そう言っと、そのイケメソ君は昨日のあたしの力を思い出したのか、
納得したようだった

ちょっと冷たくいすぎたと思ったが、別にイケメソ君は特に気に

していないようだった

「とりあえず、貴方が連れてってくれるんだよね？王様んとこ。とりあえず呼びにくいから名前教えて？」

私の言った言葉に、イケメソ君は自己紹介が遅れたーとワタワタつと慌てる

さつきからワタワタしすぎだろ、このイケメソ君。初めのあのかっこよさどこ行っただよ？

……でもシズクちゃんみたいで、ちょっと可愛いかもしれない

「申し遅れました！俺はアイダンと言います！」

イケメソ君あらためアイダンは、ぺこっとお辞儀した。

「アイダン、ね。おっけー、教えてくれてありがとう」

「いえッ！」

あ、それでは王のところへ向かいましょう。
シズク様もお待ちです」

アイダンに言われ、部屋を出た。

昨日はまあ、警戒しててちゃんと確認できて無かったけど…

廊下にでると、キラキラしたシャンデリアがぶら下がっていて、
絨毯はもっふもふだった。
ねっころがりたくなる。なにこのもっふもふの歩き心地。床で寝れるじゃん

しかも超ひろい。でかい。
ありえないっしょ、この広さ…

「豪華、広っ。
さすがはお城、って感じね。」

あたしが言っと、アイダンは嬉しそうに笑った。

「我が国——ガルディニス国の城は、この世界で二番目に立派なお城なんですよ」

「へーえ。一番は？」

「フェルミティア国です。とつても大きいんです。」

その国が世界中の国々を統制しているんです」

「そう。」

そんなフェルなんちゃらの次に大きい城を持つなんて、凄い国じゃん、ここ。」

教えてくれて、ありがと、アイダン。」

…つと、ここじゃないの？ 謁見するとこ。」

他の扉と違つとても大きく豪華な扉があり、あたしにこの国のことを言うのに夢中になつてゐるアイダンを見て、ものすごく不安になり聞いてみた。

「…っ、あああああつ、本当だあ！ すいませんっ」

焦りだすアイダン。

笑いがこみ上げてくる。抑えられない。

「はははっ、どんだけドジ!？」

「あああ、すいませんー！ーッ」

わたわたするアイダンを見てだいぶ笑ってから、私は言った。

「さて、そろそろ謁見行かなきゃ、色んな人に迷惑じゃない？」

「…あ、本当だっ」

私とアイダンは急いで謁見の間に入った。

イケメソ君が案内人（後書き）

全体的に意味不明っすねwすいません^^;

読んでくださってありがとうございます！

駄目なところ、誤字ありましたら、コメで教えてくださいます

ちょっと色々言っておくわ。王様。

謁見の間に入ると、目が少し痛くなった

廊下でさえキラキラしたシャンデリアで目が疲れていたというのに、
もう、目薬さしたい。
目、冷やしたい。

あたしが入っていくと、周りはざわめいた。

「黒ではないぞ…！」

「それに、美人で聡明そうではないか
口の悪い野蛮人と言っていたが」

「聞いていたのと違うな」

「勇者の従者である彼女にも、勇者様のように豪華な衣服を差し上げるべきでは
黒で無いというのに、失礼だろう」

謁見の間に、勇者見物にと集まってきた貴族は、ざわざわ色々なに

か言っている

「…黒じゃなくなった途端に、好意的ね
なんだか、ム力つくんだけど」

「俺も、こういう反応やなんですよね…」

アイダンはため息をつく。
少し表情が暗くなった

…何かあるのだろう。

だけど、ここで触れるべきじゃない。
人の心の傷とか辛い記憶とかえぐんの、好きじゃないし

「ぬしが勇者の従者、アオか…？」

王は少し驚いた様子だった。
黒だと思ってたんでしょね？

「はい、そうです

このたびは、そりゃあもう丁重にもてなしていただき、ありがとう
ございまーす

部屋にモップあったりほこりまみれだったりなんかの幼虫いたり、この国って、勇者の従者にそんな対応しかできないんですねよっばどお金に困っていらっしやるんですねあーかわいそうに…ほんとにもうメイドさんも客人に出せないお国だなんて、ちよっと引きますよね

助けるのやになってくるっていうか。

あと黒に対する対応最悪。もうこの国あたしの力で終わらせたいです差別する人間助けるほどあたしら勇者ご一行ヒマじゃあないのほんと国潰しますよ。なんなら勇者にテレパシーでこれ伝えられるんですよ。

マジ次から気をつけてください。

差別したら…一国の王だって、国ごと消し去りますよ

あ、そうそう。シズクちゃんにとつとと会わせてくれます?」

一瞬、空気凍った

アイダンがぼかんとして、固まってる

「…はっ

無礼なるぞ！王の御前で！！」

衛兵達が数本の刀をあたしの首もとにあてる

ひんやりとした冷たさに、あたしは、何故か冷静だった

ま。

当たり前ね

王様にすんごいこと言ったもん

「何よ、そっちが悪いんでしょ？」

私は小さく呟く

「刀、砂になれ」

さらさら、兵士の手から砂が落ちた

「…さ、シズクちゃんにあわせてよ」

ちょっと色々言っておくわ。王様。(後書き)

駄文申し訳ない…

よんでくれてありがとうございますっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5397s/>

魔王候補者のあたし。

2011年8月27日11時11分発行